

# 日米柔道実践者の柔道観に関する比較研究

～「嘉納柔道観」への反応から～

永木耕介\* 山崎俊輔\*\* 永崎久仁\*\*\* 千駄忠至\*\*\*\*

(平成13年10月31日受理)

## A Comparative Study of Value Orientation Shown by Japanese and U.S. Judo Practitioners

Kosuke Nagaki  
Shunsuke Yamasaki  
Hisato Nagasaki  
Tadashi Senda

### Abstract

Jigoro Kano, the inventor of Judo, gave shape to the values of Judo before World War II. The purpose of this study is to survey the reactions of Japanese and U.S. practitioners of Judo toward the values established by Kano, to compare their characteristics, and to identify the similarities and differences. A questionnaire was based on the following six categories of Judo values: intellectual, spiritual, self-defense, fitness/health, effective use of strength, and improvement of relationships. The survey was completed in March 2000 by Japanese (N=136) and U.S. (N=80) Judo practitioners who were highly skilled and around 20 years of age. The results are explained in the following section.

- 1) Both groups placed much value on mental training as emphasized by Kano. This trend among U.S. Judo practitioners stems from the fact that Judo was spread in the U.S. by Japanese Americans.
- 2) Both groups valued the effective use of strength and the physical and mental benefits of Judo. The values held by the U.S. Judo practitioners are based on mental training, effective use of strength, and the physical and mental benefits.
- 3) Neither group regarded the intellectual benefits that come from Judo and the Judo's aspect of martial arts as an important value of Judo. The reason that Judo is rarely recognized as a martial art is that it is considered to be a safe sport.
- 4) While many U.S. Judo practitioners regarded the concept of the effective use of strength as an important value, few gave much attention to the concept of "mutual prosperity." Because this group considered Judo as a sport, the concept of using strength effectively was regarded as a means for winning. Therefore, although the effective use of energy was originally considered as a means to nurture social relationships, which is indicated by the idea of "mutual prosperity," such a concept has little attraction for U.S. Judo practitioners. On the other hand, many Japanese practitioners still value the effective use of strength as a means to nurture social relationships.

---

\* 兵庫教育大学学校教育学部附属実技教育研究指導センター

\*\* 甲南大学保健体育研究室

\*\*\* 兵庫県加東郡社町立社幼稚園

\*\*\*\* 兵庫教育大学第5部(生活健康系教育講座)

## I. 目的

今日では、国際柔道連盟に183という多数の国・地域が加盟しており（2000年現在）、さらには柔道がオリンピック種目として存在していることが象徴するように、まさに「世界の柔道」となっている。柔道がかのように多くの世界各地で受容されてきたという事実は、柔道の有する様々な価値には世界人類的に普遍性があるということを証明している。だが一方で、日本から世界各地に伝播し、それらの国や地域で独自の受容されてきた結果として、世界各地と日本の柔道に対する価値観（すなわち柔道観）にはズレが生じていることは否めない。そのようなズレの原因には、柔道の諸価値には普遍性があるながらも、それらの諸価値のどこに優位性を与えるのかという点について異なっているからであると考えられる。今後も柔道が真にグローバルなものとして存在しうるためには、世界各地の柔道観を日本のそれと比較・検討し、普遍性とズレへの理解を深めることによって、最善の在り方を追究することを怠ってはならないであろう。本研究は、そのような研究動機にもとづき、世界のなかでも比較的早い時期から柔道が伝播し、かつその後も日本と親縁関係が深いアメリカと、日本の柔道実践者の柔道観を比較・検討し、両者の共通性と相違性を明らかにすることを試みるものである。

なお、一口に柔道観といっても、それが多面的に構成されているものであることは言うまでもないが、本研究では、なかでも柔道の創始者・嘉納治五郎（以下、「嘉納」という）によって示された柔道観（すなわち「嘉納柔道観」という）からアプローチする。柔道における様々な価値を創造し、体系づけたのは、明治15（1882）年に柔道を創始し、昭和13（1938）年に没した嘉納に他

表1.

ならない。嘉納は、すでに明治期から世界の各地に柔道を紹介・指導したが、今日に至っても、国際柔道連盟の規約・第一条に「柔道とは嘉納によって創られたものである」と示されているように、世界の柔道の象徴である。アメリカにおける柔道の伝播は、まずはじめに嘉納の直弟子である山下義韶が明治36年に渡米して柔道を紹介・指導し、その後、嘉納自身が各地を訪れ幾度かの直接指導を行っている<sup>#1)</sup>。したがって、アメリカにあっても、柔道観の異同を問う目的においては、「嘉納柔道観」が重要な意味をもつものと判断される。

## II. 方法

### 1. 調査法

本研究では、アメリカ人実践者および日本人実践者の「嘉納柔道観」への反応を捉えるために、質問紙による調査を行った。

嘉納が柔道に対して創造した諸価値については、永木（1999）が、嘉納の遺した言説を網羅的・体系的に分析することによってすでに析出している。したがって、ここに示された主要な価値（知育、精神修養、武術性、体力、精力善用、自他共栄の6カテゴリー）をもとに、質問内容を構成した（表1）。

なお、本調査では、後述のように「実践現場での資料収集」という状況を考慮し、表1に示すように、態度や価値意識の重みづけを短時間で明確に決定するために有効である「選択・順位づけ」による方法（いわゆる「価値品等法」<sup>1)</sup>）を用いた。

\*ここでは、柔道修行が「何の役に立つのか」についての6つの項目が挙げてあります。挙げられた項目を読み、あなたの日頃の柔道修行や柔道と生活との関係をよく思い起して、以下の質問に答えてください。

1. 柔道修行は、観察力、記憶力、工夫する力など、「知力」を養うことに役立つ。
2. 柔道修行は、克己（おのれにかつ）、忍耐力、禁欲の精神、品性など、「人間形成に必要な精神的態度」を養うことに役立つ。
3. 柔道修行は、不当な暴力などに対する「護身術」として役立つ。
4. 柔道修行は、「体力や健康」の保持・増進などに役立つ。
5. 柔道修行は、練習や日常生活において、「心身の力を有効に使う方法」を学ぶことに役立つ。
6. 柔道修行は、自分と他人とのコミュニケーションを深め、「共に満足を得る方法」を学ぶことに役立つ。

\*以上の6つの項目から、あなたが柔道修行において最も重要であると思うのは何番ですか。

<表1の英語訳>

Six statements are given below concerning the usefulness of Judo. When reading the statements, consider your daily Judo practice and the effects of Judo on your life. Then answer the questions that follow.

1. practicing Judo is useful for building up intellectual powers, such as observation, memory, and creativity.
2. practicing Judo is useful for developing the spiritual attitudes necessary for character building, such as self-control, patience, and asceticism.
3. practicing Judo is useful for self-defense.
4. practicing Judo is useful for maintaining and improving my health and fitness.
5. practicing Judo is useful for learning to use my spiritual and physical strength effectively, both in the practice itself and in my daily life.
6. practicing Judo is useful for learning to build satisfactory relationships with others through good communication.

\* Which statements do you believe show the most valuable aspects of Judo?

なお、質問内容の英語訳については、日本人およびアメリカ人による Back-translation を行い、特に問題はみられなかった。

## 2. 対象

アメリカ人実践者に対する調査は、2000年3月に、兵庫県の大学生による柔道友好使節団が西海岸を中心に渡米した際に、シアトル、サンフランシスコ、ロスアンジェラス、およびアリゾナ州のフラッグスタッフにて実施した。

このような比較研究を行う場合、「比較基準」(性別・年齢・柔道経験年数・技術レベル等)に配慮する必要があるが、アメリカ人対象者および日本人対象者ともに現場での観察にもとづき、その基準を満たすと判断された対象者を選定した。なかでも技術レベルの判断については、筆者を含め5段以上の観察者3名によってなしたが、アメリカ人対象者の半数近くは、フラッグスタッフで行われた全米大学選手権(個人戦)への出場者であり、比較的高い技術レベルが基準となっている。そして日本人対象者は、アメリカ人対象者と実際に練習・試合を行った先述の使節団員(約40名)を含み、その団員との比較基準に配慮して関西の3大学から日本国内で選定した。

アメリカ・日本での調査はともに現場で行い、対象者に対して直接配布・回収する方法をとった(したがって回収率はほぼ100%であった)。

表2は、以上の結果として得られた「有効回答者数・年齢・経験年数」を示したものである。

表2.

	有効回答者	平均年齢	平均経験年数
アメリカ	N=80	22.1	10.4
日本	N=136	20.2	10.7

表2に示すように、両群の平均年齢に大きな差はなく、また先述のように、比較規準としての技術レベルに配慮したために、結果的に平均経験年数にもほとんど差のない結果となった。なお、対象はすべて男子とした。その理由は、女子の実践者は相対的に数が少なく、一定した経験年数や技術レベルを有する者の抽出が困難であり、かつ、女子柔道は比較的歴史が浅いために、伝統的な観点を含む調査にはなじまないと判断したからである。

## III. 結果

まず、図1に示すように、アメリカ人実践者では、「柔道修行は、克己、忍耐力、禁欲の精神、品性など、人間形成に必要な精神的態度を養うことに役立つ」という、「精神修養」面に最優位な価値づけを行う者が57.5%と最も多い。次いで、「心身の力を有効に使用方法を学ぶことに役立つ」という「精力善用」面に最優位な価値づけを行う者が20.0%、「体力・健康の保持・増進などに役立つ」という「体力・健康」面に最優位な価値づけを行う者が17.5%あり、全体的にみれば、これら「精神修養」、「精力善用」、「体力・健康」面に中心的な価値が置かれていることが認められる。一方で、「不当な暴力などに対する護身術として役立つ」という「武術性」面、「自分と他人とのコミュニケーションを深め、共に満足を得る方法を学ぶことに役立つ」という「自他共栄」面についてはともに2.5%と低く、さらに「観察力、記憶力、工夫する力など、知力を養うことに役立つ」

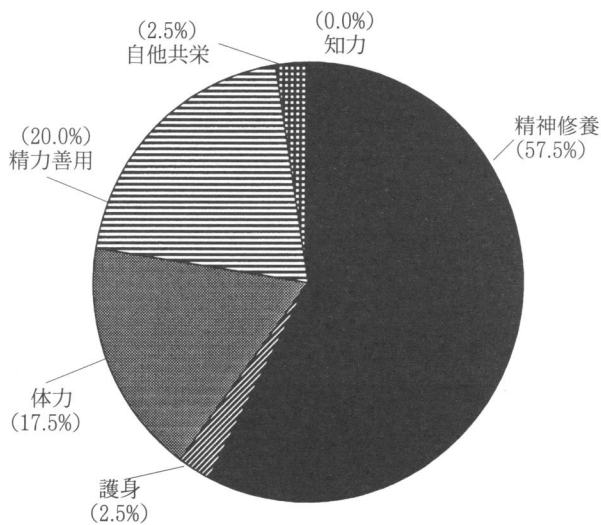


図1. アメリカ人実践者による最優位な価値の選択結果

という「知力」面は0.0%と最劣位である。

日本人実践者では、「精神修養」面に最優位な価値づけを行う者が顕著に多く(61.0%)、それに中心的な価値が置かれていることが認められる。次いで比率からみれば、「精力善用」面が11.0%、「体力・健康」面が10.3%あり、そして「自他共栄」面が8.8%と続いている。そして、「知力」面が5.1%、「武術性」面が3.7%と低いが、「知力」面がアメリカ人実践者においては皆無であり、また「武術性」面もアメリカ人実践者より若干高くなってからみれば、全体的には比較的多様な価値づけが認められ、嘉納が強調した諸価値の全般的な継承をうかがわせている。

なお、両群の結果に対するノンパラメトリックによる検定の結果、5%の危険率で有意な差が認められる(カイ自乗値:12.3873、P値:0.0298)。

#### IV. 考察

##### 1) 共通性

さて、両群の共通性についてみてみよう。

まず第一に指摘できるのは、「精神修養」面に両群とも価値づけが強い、という点である。すでに永木(1999)によっても明らかにされているように、嘉納が柔道を創始して以降、継続的に力点を置いたのが、この「精神修養」面である。先行研究(永木、2000)によれば、日本では、嘉納が没した後の第二次大戦後においても、引き続きこの「精神修養」面への価値づけは強い傾向にあるということが明らかにされており(ただしその傾向は、昭和50年代頃まで顕著であり、その後は低調化すると推定されている)、今日に至ってもそれが継承さ

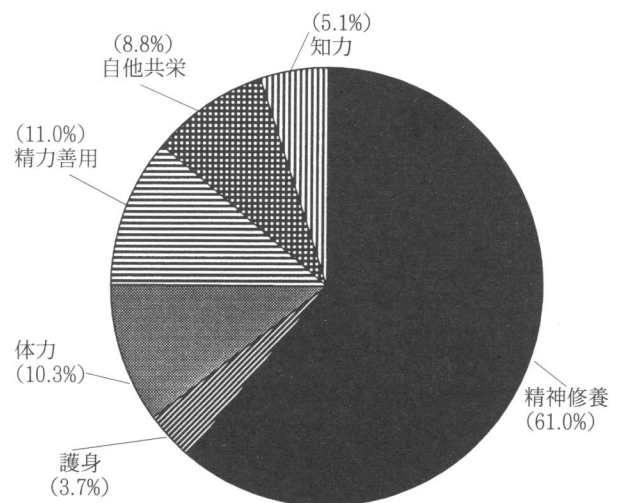


図2. 日本人実践者による最優位な価値の選択結果

れていることを実証している。また、別の先行研究(永木、1997)においても、日本人実践者は、基本的に「自らを鍛え、高める」という「自己鍛錬志向」が強いことが明らかにされている。

そしてアメリカ人実践者も、すでに示したように、「精神修養」面への価値づけは強い。この共通性に関しては、柔道が伝播した当初から日本人指導者ら(主に講道館の高弟ら)が渡米して直接指導にあたったことと、特に戦前においては、「選手の大部分は日系人であり、白人で練習しているものは、ごく少数であった」(小谷、1984、p.20)というように、長らくその指導を受けた日系人が中心となったことが強く影響していると考えられる。

日系人が柔道を愛好し、普及に努めた理由を一言で言えば、日本人としてのアイデンティティを保つために他ならない。例えば昭和7(1932)年の小谷の述懐(1984、p.25)によれば、嘉納が訪米した際に、日系一世の柔道実践者らの前で、「皆さんのこどもは、立派なアメリカ市民になるよう教育し、日本民族の持つ、優秀な美点をどこまでも保持向上せしめねばならぬ。柔道を二世が修業する目的は、ここにあるのであって、立派なアメリカ人になることは、立派な国際人になることで、これが私の説く柔道精神である」と説明したということである。そして、日系人実践者によって、保持・継承すべき日本の柔道観として最も重要視されたのは、「精神修養」面であったとみられる。例えば、昭和7(1932)年当時に、「排日感情の強いこの地(西海岸)、有色人種に多い泥棒、日系人から泥棒が出ては大変だ、と親たちは柔道の先生と日本語学校の先生から、日本人としてのよい面を育ててもらうことに期待をかけて」おり、「柔道の先生(日系一世:筆者注)は柔道の技術だけでなく、礼儀作法か

ら子供たちの躰けが大切で、なかなか忙しい」(小谷、1984、p.19) というように、戦前から柔道を通しての「精神修養」面の養育がなされていた。そして、このような「精神修養」面の養育に対する期待と実践は、戦後へも受け継がれていった<sup>(註2)</sup>。

また、「日系はもちろん、白人の間でも柔道の『礼儀を重んずる』ことについては日本の人々よりもむしろ厳格なのである」(篠原、1963) というように、白人にとっても柔道の「精神修養」面は魅力あるものであり、年々増えていく白人の実践者の間にも日本的な「精神修養」面が浸透していったと推察される<sup>(註3)</sup>。

次に、相対的にみて共通性が指摘できるのは、選択率には差があるものの(アメリカ人実践者: 20.0%、日本人実践者: 11.0%)、「精力善用」面への価値づけである。嘉納によって打ち出された「心身の力を有効に使用する(すなわち精力善用)」という柔道の方法的原理は、江戸期の柔術以来の「柔よく剛を制す」を発展させたものであるが、そこにはこれまでも指摘されてきたように(長谷川、1981)、いわゆる西洋の合理主義が加味されている。実際に力学的原理にもとづいた柔道技術の修行実践によって「力を有効に使用する」方法を学び、さらに日常生活にその方法を活かそうとする考え方は、合理主義的なアメリカ人実践者にとっても受け容れやすいものなのであろう。筆者らはすでに同内容の調査をオーストラリア人実践者にも行っているが(Westerveld・Nagaki、2001)、彼らも「精力善用」面には高い関心を示しており、それには合理主義に通じる普遍性があることを示唆しよう。

また、「体力・健康」面についても、その選択率には差があるものの(アメリカ人実践者: 17.5%、日本人実践者: 10.3%)、両群が認めうる価値という点で共通性があると考えられる。嘉納によっても柔道がもたらす身体強化あるいは健康の保持には相当の力点が置かれており(永木、1999)、実際、柔道が体力の向上に寄与することは、衆目の認めるところであろう。特にアメリカ人実践者においては、柔道によって体力の向上を目指すという志向性がうかがえ、その背景にはアメリカ人全般が「体力・健康」面への関心が高くフィットネス好きであるということが影響しているように思われる。

次に、ネガティブな面の共通性に触れることになるが、両群ともに、「知力」面と「武術性」面への価値づけは弱い結果となっている。嘉納のいう「知力」とは、柔道実践を通して養成される観察力・記憶力・想像力あるいは物事をまとめる力(「大量」という)を意味しているが、結果からみて今日の柔道実践では、日本・アメリカ

を問わず、どうやらそれらはあまり表立って強調されることはないようである。そしてまた、柔道の「不当な暴力に対する護身術」としての価値づけも今日ではあまり強調されるものではないようである。もちろん嘉納は、柔道の武術性についても、相当な力点を置いていた(永木、1999)。前川ら(1958)によって昭和24年に行われた日本における調査では、武術性への期待はかなり強いものであった。武術性への価値づけの低調化は、今日の柔道はルールにもとづく安全なスポーツであるという捉え方と関わっているように思われる。すでに国際柔道連盟では、昭和55(1980)年に「柔道は武術ではなく、オリンピック・スポーツである」と決議している<sup>(註4)</sup>。また、柔道がはじめてオリンピック種目に採り入れられた昭和39(1964)年の東京オリンピックに際して、アメリカがその一役を担ったという経緯もあり<sup>(註5)</sup>、特に戦後のアメリカは「競技スポーツとしての柔道」への関心が高いといえる。

## 2) 相違性

さて、両群の相違性として指摘できるのは、「柔道修行は、自分と他人とのコミュニケーションを深め、共に満足を得る方法を学ぶことに役立つ」という「自他共栄」面である。

日本では、嘉納以来、「精力善用」と「自他共栄」は、常にセットで捉えられてきた歴史がある。「社会の存続発展(「自他共栄」)のために「精力善用」すべし」といわれるように、「自他共栄」という目的に向けて「精力善用」するのが理想とされてきた。社会的な人間関係観としての「自他共栄」は、今日では日本でも徐々に形骸化しているという指摘もあるが(永木、2000)、今回の結果からみてそれは極端には消失していないようである。一方、アメリカ人実践者は、「精力善用」面が重視される傾向にある反面、「自他共栄」面については、比較的にその価値づけが弱い結果となっている。アメリカ人実践者にとっては、柔道実践とそのような社会的な人間関係観の育成とがはっきりと結びついてはいないようにも思われる。とりわけ競技スポーツとして志向される今日的な柔道実践においては、一方が勝てば、一方は負ける。そのような実践そのものから学ぶべきものとしての「自他共栄」について、十分な理解を得るのは困難であるかもしれない。言い換えれば、競技スポーツであることが強く認識されればされるほど、勝利するために「力を有効に使用(「精力善用」)する」のであって、社会的な人間関係観を養うことを主な目的として「精力善用」を行うという考え方は理解されがたいと捉えられる。このことはすでに挙げたオーストラリア人実践者に対する結果(Westerveld・Nagaki、2001)からもうかがえることである。アメリカだけでなく広く諸外国において(さ

らにいえば、今後の日本においても)、「競技スポーツとしての柔道」と「自他共栄」の理念的な乖離を指摘しよう。

## V. まとめ

以上から、まとめとして次のような点を示すことができる。

1) 日本・アメリカの実践者の柔道観には、嘉納が強調した「精神修養」面を重視するという共通性が見える。特にアメリカにおけるその面の継承には、柔道が日系人を中心として普及してきたという背景が関わっていると思われる。

2) 「精力善用」・「体力・健康」面についても、両群ともにそれらを認めるという共通性がうかがえる。特にアメリカの実践者の柔道観は、1) で示した「精神修養」と、これら「精力善用」・「体力・健康」面を中心に構成されている。

3) 「知力」と「武術性」面については、日本・アメリカの実践者はともに重視していないが、特に「武術性」面が重視されていない理由には、「安全な競技スポーツ」という捉え方の定着があると考えられる。

4) アメリカ人実践者の柔道観は、「精力善用」面が重視される反面、「自他共栄」面は重視されていない。競技スポーツという前提に立てば、精力を有効に使用して「勝利する」ことが主な目的となり、「自他共栄」が意味するところの「社会的人間関係観の養成」を主な目的とするということについて十分な理解をもち難いようである。一方日本ではそのような「社会的人間関係観の養成」を目的とするという価値観はまだ残存している。

以上が、今回の調査結果から導かれた点であるが、今後さらに多面的なアプローチによって各々の柔道観の全体像に迫る必要がある。

## 注記

注1) 確かな記録に残るアメリカへの柔道の伝播は、明治36(1903)年、講道館の高弟・山下義韶の渡米に始まる。彼が当時の鉄道王であったジェームズ・ヒル一家や大統領のルーズベルトと交わり、またハーバード大学やアナポリス海軍兵学校で指導したことは、柔道を知らしめるうえで大きな役割を果たした(水谷、1916)。そしてその後、富田常次郎、前田光世、大野秋太郎、佐竹信四郎、伊藤徳五郎らの講道館員が続いて渡米し、柔道の宣伝・普及がなされた。嘉納自身は、大正2(1913)年を皮切りに、大正9(1920)年、昭和7(1932)年、昭和11(1936)年、昭和13(1938)年の計5度に及んで訪米し、ハワイ、ワシントン、ニューヨーク、サンフランシスコ、ロスアンジェラス、シア

トル等において柔道の紹介、講演、指導を行っている(講道館監修、1987)。嘉納は、単に立ち寄って指導しただけではなく、例えばシアトルでは「正気館道場」、ポートランドでは「中央武館道場」というように、各地の道場設立にも関わるほどその普及に熱心であったといわれる。そのような嘉納の熱心な指導もあって、戦前にはすでにハワイ、西海岸(シアトル、サンフランシスコ、ロスアンジェラス等)、および東部(シカゴ、ニューヨーク等)に柔道が広く普及・定着した。昭和7(1932)年に渡米した小谷(1984、pp.19-20)によれば、なかでも、やはり日系人の多いハワイと西海岸(特にロスアンジェラス)は有段者数も多く盛んであったという。事実、米国内ではまず最初に昭和8(1933)年にハワイで、次いで昭和11(1936)年にシアトルで「有段者会」が組織されている(老松、1976)。  
注2) そのことは、例えば戦後(昭和27年)から発行されている「柔道新聞」の記事からもうかがうことができる。以下に、「精神修養」面に関して報告されている記事内容を拾い挙げてみよう。

- ・「(指導は)なかなか厳格で日本式であり、とくに礼儀作法はやかましい」(於シアトル；一戸正雄、昭和42年1月1日付4面)
- ・「すべて日本式で、ことに少年組の道場内における礼儀正しさと稽古ぶりには、目をみはらせるものがありました」(於ハワイ；中村良蔵、昭和42年7月20日付2面)
- ・「アメリカでは少年たちの間に、柔道に対する関心の高いことも印象に残った。(中略)父兄たちの柔道に対する関心が大きく、少年たちの柔道に関しても『しつけ』とか『強い意志』というように、単に身体的発達だけではなく、精神面の成長を期待しているようである。」(アメリカ全般；工藤一三、昭和43年5月20日付4面)
- ・「アメリカでは柔道が精神修養のスポーツとして受け入れられ、日本よりは家庭のしつけがきびしく、柔道の礼儀正しさを、青少年の家庭教育にとり入れている」(アメリカ全般；中村良蔵、昭和46年1月20日付3面)
- ・「古風なくらい日本流の礼儀作法がきびしいところです。礼儀作法の点では日本の青少年もかなわず、むしろ見習うべきだと思います。」(於ハワイ；中村良蔵、昭和46年7月10日付1面)
- ・「日本的な米少年チーム；『礼に始まって礼に終わる』』ということは、しんそこから根性をうえつけることであり人間作りの基礎である。そういう意味において、本場の日本柔道の方がアメリカの少年諸君に、あべこべに教えられるところがあったのではなからうか」(米山武人、昭和46年9月1日付3面)、

等。

注3) 例えば昭和41(1966)年当時において、講道館における外国人有段者数はアメリカ人が最も多く登録されており(丸山、1967:その数は4,084人で日本を除く全ての国別有段者数の45%を占めている)、そのことは戦前以来、日本に来て修行するアメリカ人の多さを示すとともに、「柔道は日本に学ぶもの」という日本志向の強さを表している。

また、今回の調査において「日本人から柔道を習った経験」についても尋ねたが、対象者(80名)のうち42.5%(34名)が「一ヶ月以上」日本人指導者に習った経験をもち、さらにそのうち、「一年以上」に亘って習った者は76.5%(26名)を占めている。このような日本人指導者に習った経験の程度は、筆者らがこれまで同様の調査を行った国々(オーストラリア、ニュージーランド、フランス等)よりも明らかに高い。

注4) July 26, 1980に行われたInternational Judo Federationの臨時総会では、"Judo is an Olympic sport and therefore proposes that it should be no longer counted as one of the "martial arts". "と提案され、その結果、柔道は武術ではなく純粋なスポーツであると決議されている(IJF臨時総会議事録、1980)。ただし、日本では、"柔道はスポーツである"と言明されたことはなく、学校教育機関をはじめ伝統文化としての"武道(Budo)"の一つに位置づけられており、日本と国際柔道連盟ではその点からも"柔道"の捉え方にはズレがある。

注5) このことは種々の史料からもうかがえることであるが、今回の調査時に、戦後の昭和35(1960)年から40年間以上に亘って在米の柔道関係者・篠原一雄氏による証言も得た。

## 文献

長谷川純三(1981) 嘉納治五郎の教育と思想. 明治書院: 東京.

IJF臨時総会議事録(1980) <http://www.ijf.org/congress/cg80-11.html>.

一戸正雄(1967) 柔道新聞. 昭和42年1月1日付4面.

講道館監修(1987) 嘉納治五郎大系第13巻. 本の友社: 東京.

小谷澄之(1984) 柔道一路~海外普及につくした五十年~. ベースボール・マガジン社: 東京.

前川峯雄、大瀧忠夫、松本芳三(1958) 柔道の興味調査一年令別の考察一. 講道館柔道科学研究会紀要第I轟: pp.75-84.

丸山三造(1967) 世界柔道史. 恒有社: 東京、p.597.

水谷竹紫(1916) 努力の人山下七段. 講道館編 柔道2

(7): pp.42-51.

永木耕介(1997) 柔道実践者のスポーツ価値志向に関する実証的研究一特に伝統性と近代性の視点から一. 武道学研究30(2):1-8.

永木耕介(1999) 嘉納治五郎の柔道観の力点と構造~言説分析によるアプローチから~. 武道学研究32(1):42-69.

永木耕介(2000) 戦後柔道における嘉納治五郎の柔道観の継承について~柔道新聞のメッセージ分析を通して~. 武道学研究32(2):14-31.

老松信一(1976) 柔道百年. 時事通信社: 東京、p.178.

篠原一雄(1963) 柔道新聞. 昭和38年2月20日付4面.

Westerveld,R.・Nagaki,K.(2001) A Study of Values in Australian Judo in Comparison with Jigoro Kano's Judo Values. Proceedings of Intel Confer. for 20th Japanese Society of Sport Education.

## \* 追記

「ニューヨークの世界貿易センタービルなどが襲われ、約三千二百人に上る犠牲者を出した米同時テロは、多くの『英雄』をも生み出した。ユナイテッド航空93便に乗り合わせ、ハイジャック犯と格闘して被害の拡大防いだジェレミー・グリック(死亡当時三十一歳)もその一人だ・・・」(読売新聞・2001年12月30日付6面)

ジェレミー・グリック氏は、1992年の「全米大学柔道選手権大会」の優勝者であった。同大会を本研究の調査対象として選んだこともあり、他人事とは思われない。柔道精神をいかに発揮した彼の勇気と行動に心から敬意を表するとともに、ここに追悼の意を捧げたい。



7歳から日本人柔道家小笠原氏の国士道場で柔道を始め、大会でも大活躍したジェレミー・グリック氏(11歳頃)

(「武道」2001. 11月号、P.145より)